

卒業を前にして思うこと



工学部学生 池田和枝

卒業を目前にしたある日、同級生のふ報に接した。一年間の闘病生活の末の、あまりにも早すぎる死だった。亡くなる一か月前に、「明日、退院するよ。リハビリして体力ついたら、西条に行くからね。」と、元気な声で電話をかけてきてくれたのが最後だった。完治したものとはばかり思っていたのに、あまりにも突然な死だった。突然すぎて、いまだに、彼の死が実感できない。またいつものように、「元気になったよ。」と、電話をかけてきてくれそうな気がする。いつも、元気な声で電話をかけてきてくれたのに安心して、彼の病状が悪くなっていたことにまったく気づかなかったことが、悔やんでも悔やみきれない。彼のことを思うと、もっとお見舞いに行けばよかった、もっと手紙を書けばよかったと、後悔することばかりである。

23歳の若さで、学業半ばにして、逝ってしまった彼は、どんなに無念であっただろうか。たくさんやり残したことはあっただろうに。「人生は、はかないもの」と、よく言うが、そんな言葉では、とても割り切れない。やはり、生きていればこそその人生ではないか、そう思う。彼には、もっと、もっと生きていてほしかった。そして、もっと、もっと力いっぱい生きて、自分のしたいことを、思いきりしてほしかった。そんな思いでいっぱいだ。

しかし、そういう私たちは、はたして、自分の人生を力いっぱい生きているのであろうか。これから、私たちは学業を終え、ある者は大学に残り、またある者は社会へ出ようとしている。それぞれ、自分の思う道に進もうとしている。けれども、それぞれの道に進む

前に、ふと後ろを振り返ってみたとき、私たちは、人生を精いっぱい生きているのであろうか。充実した学生生活を送り満足感でいっぱいの者、いつのまにか時が過ぎ、中途半端な学生生活を送った者、さまざまだと思う。恥ずかしながら、私は後者である。4年前、希望に胸をふくらませて入学したものの、時の経過とともにその希望がどんどんしぼんでしまった。学業にしても、遊びにしても、結局中途半端に終わり、何ひとつ満足感が得られなかった。あれもしたかった、これもしたかったと思うことばかりである。せつかく、この世に「生」を受けたのならば、その「生」を力いっぱい生きなくて、いったい、何になるのであろうか。亡くなった友人に対しても、申し訳が立たない。今春、私は社会に出る。温室の中のような学生生活と違って、社会に出れば、つらいことや苦しいことがたくさんあると思う。けれども、亡くなった友人に対しても、自分自身に対しても恥ずかしくないくらい、「力いっぱい生きた」と、言えるような社会人生活を送ろうと思う。

今まで一緒に学んできた私たちは、これから、全国各地にちらばってしまう。この先、一生会えなくなってしまう人もいるかもしれない。そして、私たちは、たくさんの出会いと別れを繰り返していくだろう。けれども、私は、この大学時代に知り会った人たち、支えてくれた人たちを決して忘れない。絶対に、忘れないと思う。諸先生方、4年間ありがとうございました。それから、同級生の皆さん、力いっぱい生きて下さい。そして、最後に、故井川周君の御冥福を心からお祈りします。